

ぼうさい



みくまじろ

No.8

H28. 9. 23 発行

みくまの支援学校

育友会 防災研修部

第3回 防災研修部会 ①

防災ライブラリー開設準備



9月15日（木）、第3回防災研修部会の中で「防災ライブラリー」の開設準備作業を行いました。このライブラリーは、育友会が学校とともに「子どもの命を守る取組」を進めていく上で図書や視聴覚ソフト等を活用することをおして、育友会員の防災意識を高めたり、家庭での防災対策の向上を目指したりするものです。気軽に利用していただき、楽しみながら防災に関心をもってほしいです。



玄関ホールに開設された「防災ライブラリー」

防災研修部員による 準備作業



防災研修部会の後半、出席者で準備作業を行いました。防災に関するたくさんの資料があることにびっくりしました。ぜひとも育友会員の皆さんに利用していただき、有効活用していただきたいです。運用開始は、9月23日（金）です。



毎日新聞コラム欄から

9月1日は、「防災の日」です!

榎本校長先生による特別寄稿『みくまの方丈記③』で紹介された「土手の花見の防災」に関する記述が9月1日「防災の日」の新聞コラム欄でも紹介されていました。



「土手の花見」という話がある。川の土手はよく桜の名所になっているが、あれは冬に土中の氷結で緩んだ堤防を踏み固め、梅雨の増水に備える防災上の工夫といわれる。古くから災害と共に生きる知恵を蓄積してきた列島の住民である▲防災心理学の矢守克也(やもりかつや)京大教授はこの土手の花見をハード、ソフト両面の絶妙な組み合わせから成る「災害文化」の好例という。災害文化とは度重なる災害の経験から生まれた知恵やルールが息づく人々の生活文化のことで、地域の防災や減災に大きな役割を果たす▲逆に先の熊本地震では住民の間に地震が少ない土地という思い込みがあって、被害を大きくしたといわれる。そして観測史上では台風が上陸したことのなかった岩手県の高齢者施設などでの台風10号による惨害である。避難の遅れをもたらしたのは何だったのだろう▲近くを流れる小本川(おもとがわ)の氾濫(はんらん)により認知症の入所者とみられる9人が亡くなった岩泉町のグループホーム「楽(ら)ん楽(ら)ん」だった。空撮映像で驚くのは、入所者全員が無事だった3階建て介護施設がすぐ隣接していることだ。わずかな距離の避難を阻んだ濁流がうらめしい▲聞けば当時、小本川の水位は近くの観測点で川岸の高さを越えたが、その流域での自治体の避難勧告はなかったという。もしやそこに台風の直撃に対する災害文化の空白が影響してはいなかったか。またも災害弱者を守り切れなかった防災のネットのほころびである▲地震はもちろん、台風や集中豪雨もいつどこを襲おうとおかしくない現代だ。各地の経験や知恵を列島全域が共有する災害文化を育てたい防災の日である。

(『毎日新聞』コラム「余禄」から引用 H28.9.1)



みくまの方丈記 ⑥ ～豊かな心を育てる～



榎本校長先生による特別寄稿です。

本校に着任した2014年4月、ある卒業生の話になった。彼を知る先生は皆、いい子だという。更に突っ込んで「どういうところが?」と聞いてみた。「授業の始まりでプリントを配ってもらったとき、見た目に一枚だけ不良なのがあった。良いのをみんなに渡し、最後に自分がそのプリントを取った」と一人が答えてくれた。その瞬間、自分の昔の記憶が蘇った。給食当番をしていたとき、女子と配膳で配るスプーンの取り合いになった。楽な仕事を奪い合ったのである。結局先生に「女の子に譲りなさい!」と怒られ、納得がいかなかったが、しぶしぶ譲ったことであった。幼い頃の苦い思い出の一つである。

豊かな心は、一人ひとりが生涯にわたり求め育てていくものである。自分の心に育つバオバブの木*の芽も自分で処理していかなければならない。私たち教職員は子どもたち以上に豊かな心が求められるのは言うまでもない。前出の卒業生のように、教師をも上回る心根を持った生徒を一人でも多く育て、社会に送り出したいと強く思っている。

*星の王子さま(サンテグジュペリ)より。